

宴のあとに

権利委員会だよりにかえて 加茂嘉久

会報に著作権のことや、知的所有権のことなど、思いつくままに紙面を埋めさせて貰った二年間は、あつという間に過ぎました。さあ選手交替、と思った矢先、新編集長から原稿を、という連絡。始めて、何の準備も下調べもなく「たより」を書く破目になりました。仕方がないので、第三回総会のことでも書きましようか。といっても、前委員長としては会議の進行に最大協力して殆ど発言しなかったたので、あとのパーティのことしかかけませんが、不悪。

たまたま烟徳利の列に近かったたので、手酌でやっていると、酔っぱらいが一丁上がりです。ちよつと辟易されながらも、オダあげていたのは、やつぱり著作権のこと。

デザインに著作権は当然だと思ふし、すぐにでも認めて貰いたい。しかし、その先の見通しがなきやダメだ、としゃべり続けています。著作権は、自分にもあるが他人にもある。打ち合わせの時、自分以外の作品をチョコツとコピーして参考を持つて行くようなことは無いだろうか？ その時、その誰かさんの了解をとりつけたり、使用料を振り込む複雑さに耐えられるだろうか？ 自分にある武器は他人にもある。著作権は諸刃の剣と考えると、コピート時代は生きられないよ、と繰り返していました。

それから、著作権は産業社会の私権として確立して来たたので、不動産の所有権などと同じように反社会的使ひ方ができる。適当な例ではないがと断りながら、藤田嗣治は戦争協力を追求されて日本美術界からイビリ出された、と思ひ続けている未亡人が、日本で出版される美術書や事典への掲載を拒否し続けていることを挙げました。こんな状態が続くと、日本美術にとつてかけがえのない画家の絵が、

日本人の目にふれなくなつてしまふ。レオナール・フジタというフランス人の絵は、留学して見に来い、という使ひ方は文化の為に役立つていだろうか。

かといつて、社会的有効さを優先させる著作権運用だと、公的機関（政府や政党や文化機関）の判断が介入してきて、私権として成り立たず、創作の自由さは失われてしまふ。などと、まだ見ぬ先の取り越し苦労をしゃべりまくつていました。全く僕は何というヘソ曲がりなんでしょうね。でも、お互い酔っぱらい同志、強く反論もせずに聞いて下さつた方々には、脱帽。

ともかく、ナアナアぐらしをして来た日本人には、なじみにくい著作権という理屈を社会に定着させるには、日本の文化の捉え方、利害の概念から変えなきゃならないことは確かでしょう。それによつて生まれる矛盾も、外国と同じではないはず。先進国ツラしているくせに、アイデンティティに関わる難儀は積み残しにする国民性と、目立つことを嫌悪する文化を育てて来たたのですから。

しかし、これからは変わつてきますよ。今は新人類などとおチオクラしている人達が、日本文化を創つていくんですから。彼等が、不合理な壁の前で歩みを止めなくてもすむように、風穴のひとつも開けておいてやりましよう。それと同時に、旧来の慣習にしがみついて、自分の取り分は何ひとつ減らしたくない人達にも判る言葉で説得しましよう。これからは、そんな時代じゃないよ。頑固すぎるんだ、太平洋戦争おっぱじめなきゃならなくなるよ、と。そして、お互いに三方一両損みたいな合意をとりつけたいものです。それが結果的には二一世紀の三方一両得を生むと思うんですがねえ。

